

## 令和5年度 学校自己評価システムシート (東邦音楽大学附属東邦第二高等学校)

目指す学校像	・音楽芸術の一貫教育を通じ、情操豊かな人格の形成を目指す
本年度の重点目標	1.基礎学力の定着と充実を図る(専攻実技・音楽教科・普通教科の学びを通して「知識・技能」の習得、「思考力・判断力・表現力等」の育成、「学びに向かう力・人間性等」を養う)→主体的・対話的で深い学びへと繋げる 2.基礎的・生活習慣の確立 (挨拶礼法、授業規律の確立、思いやるのある思いやりのある人格形成) 3.高大連携接続教育 (音楽を通して一貫教育)の充実

※学校関係者評価は、最終日の学校関係者会議後、学校自己評価をもとに4/27(金)実施の日数で、(実施日令和6年3月17日)
学校関係者：4名

領域	評価項目	年度目標		年度評価				
		現状と課題	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	
学習指導	○新学習指導要領に基づき、『知識・技能』の指導では、基礎学力の定着と充実を図る。 ①専攻実技・音楽教科・普通教科の学習を進めて行く中で、必要不可欠な基礎的な理論と基本的なスキルの習得には個々の生徒の状況を踏まえた指導を行う。 ②音楽科目を核とした、教科等横断的な学習を通じ思考力・判断力・表現力の育成を図る。特に、新指導要領での新設科目についてはその指導目標を理解し、指導計画を確立していく。 ○思考力・判断力・表現力等の育成(対話的で深い学びの実現に向けた授業改善) ①専攻実技、合奏・合唱の授業を通して豊かな感性の育成と協働的な学びを習得する。 ②教育課程を通して、道徳教育を推進し他者とともによきよき生きていく人間性を涵養する。 ○学びに向かい合う力、人間性の育(各教科・科目の特性を生かした形で、各授業に於いて『主体的な学び』を実施する) 同時に、各授業での生徒間の学習活動(対話的・主体的な学び)の推進を図る。	・音楽の基礎科目である『楽典』『聴音』『新曲視唱』の力は、音楽の学びに於いて必要不可欠なもので、その力の定着と充実には専攻実技の学びを大きく影響を与えるものである。行く中で各専門実技の学びは、入試科目として設定せず入学後基本的な事項から指導していく事を指導方針としている。しかし、実際、指導をしていく過程で、次第に学力差が顕著になっていく現状が見受けられる。各専攻実技の基本的な演奏スキルと定着と表現力をより円滑に育成していくために、音楽の基礎である『楽典』・『周音』・『新曲視唱』の学力を如何にして向上させていくかが、大きな課題となる。 新学習指導要領の施行に伴い編成した新教育課程の教科・科目の普通科目、音楽科目の指導内容に関して共通理解を図った。 観点別評価に関しては、①知識・技能 ②思考・表現・判断 ③主体的に学習に取り組む態度の中で、③『主体的に学習に取り組む態度』を評価するにあたって、『粘り強い学習への取り組み』と『自らの学習の調整』をして、その結果、しっかりと学習し、成果に結びつたか』を評価することを、各教科・科目の特性に合わせて評価していくことを、各担当教員が検討を進めていく事とする。	・『楽典』・『聴音』・『新曲視唱』・『コルチーニ』の学力向上の為に、各指導担当者と連携をもとに①生徒が苦手としている要素には何が有るのか、②何が共通している傾向がないかをどうかを調べる、③①②の結果として、生徒が効果的に基礎スキルを身に付け、さらにその力を充実させていくことを目標に指導を進めていく事とする。特に、 新曲指導、コルチーニの苦手な生徒には共通点がある、そこに焦点を当て、共通する問題となる要素を指導することにより改善が見られた。  教科・科目等の横断的学習は、生徒達に新たな幅広い学びを理解させることに効果的である。 例えば、普通教科の「英語の授業」で「環境問題」「社会問題」「経済問題」などを、『英語を学ぶ』は当然で、いまや『英語で何を学ぶか』に変化し、グローバル教育の一つと見	・『楽典』・『聴音』・『新曲視唱』・『コルチーニ』の学習においては、授業で学んだ内容が各個人の練習量によって基礎力の変化が把握できる。『新曲視唱』・『コルチーニ』が苦手な生徒は同一生徒である傾向があり、その生徒達には、 新曲視唱、コルチーニのそれぞれの授業担当者がどのような部分で苦手化なのかを調査し、その指導対策を二人の担当者が検討し、分かった点をそれぞれの担当者が科目の特性を踏まえ指導していく事とする。『楽典』の指導に於いては、理解が深まり項目に関しては、その項目を時間をかけて、様々な例を取り上げ、段階を積み重ねて指導をしつつ、各段階ごとで理解度を確認しながら、次の段階へと進めていく事とする。やはり、音楽全般の学習に必要な不可欠な科目の、地道な指導の必要性がある。	・『聴音』・『新曲視唱』・『コルチーニ』に於いては、指導と生徒のその学習の得た状態は、生徒個々の得意に違いはあるものの成果は認められた。『楽典』に於いては、理論的に組み立てて理解を積み上げていくという科目の特性があるため、生徒は反復学習によって楽典の知識は増えていくもの、それを応用して次にすすむ思考力・判断力が必要とされる領域では、『基礎学力』(特に、数学的思考)がどれほど定着しているのかに起因する状況が指導する側であり、普通教科 (数学) との関連性も考慮し、更なる工夫をした指導を検討する必要がある。  来年度は全学年が新指導要領に基づき、新カリキュラムによる指導が実地化されるため、該指導方針、指導内容、その学習効果等をPDCAによって、生徒の学習状況、指導内容のレベル・指導方法を調整して、段階を踏んで『観点別評価』により、「新しい学力観」による評価へと結び付けられることを目標とする。	A	・音楽の基礎力の一つである、『楽典』の学習内容の定着・充実はまだ工夫する必要がある。2年生、3年生の『音楽理論』の授業の一部で、継続して指導していくこととする。  高大連携接続の方針から高校での学習から大学進学後の学習がより円滑に継続できるよう、再度生徒の学習状況の推移を確認していく必要がある。  現在の学習指導に於いては、学習指導要領の移行期であるため、今後の学習の方向として、③の主体的に学習に取り組む態度の育成の要素を普通科目のみならず音楽科目にも取り入れてみることも検討していくとする。 但し、音楽科に於ける、最重要科目である『専攻実技の評価』に関しては、『試験での各生徒の専攻実技の演奏スキル、表現力』が、その生徒の評価の全てであるという考え方が、『音楽という特性』から考えられ、『観点別評価』の観点から、適切な指導が必要である。  新学習指導要領に基づき、必修の『普通教科・科目』の履修・修得は、音楽科の専門科目の履修・修得の前提となるので、それらの学習のペースとなる基礎学力の定着と充実を図るため、更なる創意工夫と学習時間の確保を検討する必要がある。	
		○普通科目の基礎学力の定着と充実 ①特に国語力の4つのスキルの基礎力の定着と充実は、教育課程全般の教科・科目の履修・修得に必要であり、不可欠なものであり、新指導要領でも取り上げられており、改めて指導指導方法の検討が必要とされ(生徒達に、いかに興味を持たせ、分かりやすく、教員で習得した内容を運用できるようにするか～新指導要領の目標を鑑み、授業の工夫が必要とされている。	基礎学力(英語・数学・国語)の定着が十分でないケースが見受けられる。 新学習指導要領(中学校)では、旧学習指導要領と比較して、3年間て学び、習得すべき学習内容に幅と深さが増し「より充実した学び」がいろいろなる角度から、各教科の特性を踏まえ出来るように工夫されている。しかし、その結果、場合によっては、生徒に過重負担を与えてしまふ可能性がある。特に、学力差が生じやすくなる3教科に於いては、顕著に表れる可能性があり、その対策が必要不可欠である。音楽科受験生は、中学校での学習に加えて、音楽科受験の為に、専攻実技の試験が課せられるので、その準備に相当の時間が費やされる。そこで、本校では、これらの教科の指導に当たっては、特に一年次では、『中学校での学習内容の復習』を取り入れつつ、その内容がどの程度理解され、学力として定着しているかを確認しながら、『高等学校での学習内容』を指導していく事としている。	基礎学力を定着、充実させるためには、下記の4つの点を重要視し、その指導に当たることとする。 ①授業では、毎時間、その日の題材のポイントを明確に生徒に提示し、ポイントを具体的な例を挙げながら、分かりやすく説明する。勿論、授業時間内で生徒との質疑応答により理解を確認しながら授業を展開していく。同時にグループに分かれて、話し合いながら問題の解答を導くことも指導する。②適宜、各単元ごとに小テスト、課題を課し、理解度のこまめにチェックしていく。③各学期の評価に当たっては、『主体的な学習への取り組みの把握をする為』の「課題・レポート」を適宜、必要に応じて課すこととする。	・基礎学力の定着に関しては、『反復学習』により効果が認められた。 ①国語の『漢字』の学習指導『漢字ワーク』の定期的な宿題とその提出。次に、その宿題の範囲内の『漢字テスト』の実施。テストでは合格基準を設定し、基準以下のものは、再度同じ範囲の『漢字テスト』を課す。 ②英語では、各学期、教科書以外の教材の使用 1『RapidReading』:平易で、ある分量のある英文を、限られた時間内に読み、その内容がどれほど理解できたかの練習。 2その授業時間内にプリント1枚を使い、生徒との英語での質疑応答、各Paragrahこの内容を生徒が英語で説明する。文章全体で筆者が何を伝えたいかのKey Wordを見つせさせる。このタイプの学習を繰り返すことで、短時間で英文解釈のスキルの向上が認められる。出来るだけ回数を熟すとかがキとなる。	・『国語力』の基礎力の定着と充実には、『国語』の教科の指導のみならず、他教科に於いても、適切な日本語の使用の指導は可能であり、普通教科全般の指導を通して取り組むこととする。 『国語力』とは、 ①日本語を正確に『読む』『書く』『聞く』『話す』という4つの基本的な言語活動能力が十分習得できていなかった為、高等学校での普通教科・科目の学習、更には音楽科での専門科目・科目の学習に支障をきたしている状況がある。それ故これらの教科・科目の学習内容の理解が不十分である。 ②対応策は、各教科・科目を指導していく中で、その教科の内容を指導していく事と並行して、その教科における実際の日本語の使われ方の指導を教科の特性を生かして指導していく事が必要とされる。	A	現在の学習指導に於いては、学習指導要領の移行期であるため、今後の学習の方向として、③の主体的に学習に取り組む態度の育成の要素を普通科目のみならず音楽科目にも取り入れてみることも検討していくとする。 但し、音楽科に於ける、最重要科目である『専攻実技の評価』に関しては、『試験での各生徒の専攻実技の演奏スキル、表現力』が、その生徒の評価の全てであるという考え方が、『音楽という特性』から考えられ、『観点別評価』の観点から、適切な指導が必要である。
		○生徒指導に於いて、PDCAを基に年々変化する生徒の生活状況を把握しながら、それに対する方策を検討する必要がある。以下は、継続的な指導が必要な項目。 1.基本的な生活習慣の確立の指導 ・挨拶礼法 ・綺麗な言葉遣い 2.授業規律の確立 ・時間厳守 ・下校時間の徹底 ・個人所有物の管理 ・携帯電話の規律ある使用方法 3.思いやりのある人格形成	1.基本的な生活習慣の確立 ・挨拶礼法～生徒からの自主的な習得としてはまだ確立されて状況である。基本的な生活習慣として自立し更に継続した指導を図る。 ・綺麗な言葉遣い～ホームルーム、全校集会等における指導と共に、日常の対教員、対生徒に対して不適切な言葉遣いがあった場合は、その都度その都度指導をし、改めて正しい地道な指導の継続が基本的な生活習慣として定着させる方策として、教員全体が同一歩調を取り組んでいく事とする。 2.授業規律の確立 ・時間厳守の指導は『全学年・全員』の遅刻0を目標とした。 ・下校時間については、5時完全下校を出来る、基本的な学校の生活習慣の確立が見られる。今後も継続して指導に取り組む。 ・個人所有物の自己管理に関して～生徒の個人所有物の『置き忘れ』『紛失』が目立つ現状がある。生徒の机の中・机上・個人ロッカールの整理整頓が出来ていない状況が大きな課題と見受けられる。 ・本校での携帯電話の指導：規律ある携帯電話の使用の指導をHRや全体集会で指導しているものの、完全に徹底できていない。また、メール、ライン等の不適切な使用による生徒間のトラブルは減少しているが、継続的な指導は必要である。	①『下校時間の徹底』は昨年度からの指導課題でもあり、ほぼ徹底できてきた。これは、継続した指導により『規律ある習慣』の確立が図られた。下校時間の厳守・徹底は生徒の安全・安心を確保するために、必要不可欠な課題であった。  ②個人所有物の自己管理 担任が毎日指導と運動させて指導した結果として、改善が徐々に認められた。しかし、教室内の整理整頓においては、生徒個人の認識に温度差があり中々改善に苦慮していた。  ③川越警察・生活安全課の金子信人氏による、『防犯講話』『薬物乱用防止教室』を計画し生徒への注意を喚起させていくことを計画した。	①『下校時間の徹底』 生徒指導主任、担任、直任教員との連携で毎日確認して下校指導をした結果はほぼ徹底できた。ただ、本校は音楽科であり、実技レッスンが時として下校時間後に終了する場合もあり指導の難しさもあった。  ②『個人所有物の自己管理』 担任が毎日指導と運動させて指導した結果として、改善が徐々に認められた。しかし、教室内の整理整頓においては、生徒個人の認識に温度差があり中々改善に苦慮していた。  ③川越警察・生活安全課の金子信人氏による、『防犯講話』『薬物乱用防止教室』での具体例を挙げた講話は、登下校時の安全確保、又、薬物の危険性に対して、生徒達に注意を喚起させた。川越警察・生活安全課による講話は今後も継続していくこととする。	①『時間厳守』 これからの実社会におけるキャリア教育の根幹となる部分で、『基本的な生活習慣の確立の最重要課題』の一つとなり、継続して根拠よく指導していくことが不可欠である。  ②『教室内の整理整頓』 クラスの『学習環境』に影響が大きく、来年度も継続指導の必要性が認められる。  ③『携帯電話の指導』 『携帯電話安全教室』の開催を計画。SNSの使い方が日々変化している現状の中で、生徒間の誹謗・中傷の原因となる可能性が大きい。生徒の安全・安心な学校生活を確保するため、更なる細部に渡る指導の必要性がある。	B	

学校関係者 評価
学校関係者からの意見・要望・評価等
○高い評価を受けている項目 1.学校経営全般：学校は、大学での教育を視野に入れながら、音楽芸術探究を目標とした、一貫教育の推進に取り組んでいる。実践に取り組んでいる。同時に、教育方針に基づいたOne to Oneの教育を実施している。  2.教育課程全般：実技の指導に於いて、計画的に、個々の特性・能力に応じたきめの細かい指導が実施されている。更に、クラスコンサート、東邦第二コンサートでは、技能のみならず、一人ひとりの興味・関心に応じ、主体的な取り組みができ、自主的な学びの機会が得られる。  3.生徒指導全般：学校は生徒理解に努め、適宜、適切に教育相談を行っている。  ○学校として次年度に向けた対応策 1.教育活動をHP、SNS等で積極的に公開していく。 2.音楽教科、普通教科をバランス良く習得できるようにしていく。 3.行事予定表の更新の検討。 ○改善要望項目 1.学校は、教育活動を参観、通信、HP等で積極的に公開して欲しい。 2.音楽教科、普通教科をバランス良く習得できるようにして欲しい。 3.演奏活動、学校行事は適切な時期に適切な内容で実施して欲しい。